

## 常陸大宮市 文書館だより

## ～昭和11年の大宮場所～

4月12日開催の大相撲常陸大宮場所が近づいてきました。本市域では、かつて3回の大相撲巡業が行われていたのをご存知でしょうか。



▲板番付

## ◇甲神社に残る板番付

大相撲で用いられている力士の順位表である番付。現在も本場所のたびに会場正面に掲げられています。板に手書きで力士の名と序列を記し、興行の宣伝と番付の周知のために用意されました。頭部が山形になっているのは、大入りを願って「入」の文字をかたどったものといわれています。確認されている最古の板番付は、天明年間（1780年代・相撲博物館蔵）のものです。当時は本番所が春場所（1月）と夏場所（5月）の年2回だったため、本場所のない時期は、力士をいくつかに分けて各地で巡業が行われました。この後本場所は、昭和24年から3場所、28年から4場所、32年に5場所となり、現在の6場所制になったのは昭和33年からです。

さて下町の甲神社には、昭和11年2月の地方巡業で使用された板番付が残っています。板番付は、高さ165cm、巾140cmの大きさの杉材で作られていて、根岸流の独特の文字で、力士や行司などおよそ100人の名が書かれています。

墨色が薄くなり、すべての文字を解読することはできませんが、東の横綱は「男女ノ川登三」と読めます。茨城県菅間村（つくば市）出身の男女ノ川は、それまで大関でしたが、大宮巡業のあった昭和11年2月に横綱免許となり、出身県での巡業に花を添えることになったのです。

また関脇に能代瀧、小結に旭川、前頭に筑波嶺や羽黒山らがいました。そして西の大関は大潮清次（治）郎、小結には、のちに第35代横綱となり69連勝を成し遂げる双葉山定兵衛（のち定次）が名を連ねます。同じく前頭には大八洲らがいました。さらに西の前頭には、日本の統治下にあった朝鮮出身の大王山吉之助の名もあります。

神前で奉納物として発展してきた相撲は、地方相撲の発端ともなりました。この板番付にも、幕下では大相撲の力士として確認できない名前が入っています。番付外の力士、あるいは地元相撲の力士といった可能性も考えられそうです。

また相撲の興行主を勧進元といい、番付最下段の中央に記されます。この時は南町の川田家の主人、井坂新吉が勧進元となりました。川田家は当時旅館業と映画館「川田座」を南町で営んでいて、大宮宿のにぎわいを支えていました。土俵は川田座の西側の畑に作られたようです。

いずれにしても当代の名力士を集めた巡業には、多くの観客が集まったことでしょう。

## ◇続く大相撲巡業

大宮での大相撲巡業は、このあと昭和28、9年頃（会場：大宮小学校校庭）と昭和60年10月8日（旧大宮町営グラウンド）の2回開催されました。前者では大宮町商工会（任意商工会）が勧進元となり、衆議院議員山崎猛事務所の協力を得て実現しました。横綱千代の山、吉葉山、大関栃錦らの人気力士が来町しました。土俵を中心として客席の周りをむしろで囲い、会場を作るのは大変な作業だったそうです。また昭和60年興行では、横綱千代の富士、大関北尾（のち横綱双羽黒）らが来町し、500人余の観客が訪れました（「茨城新聞」昭和60年10月12日）。

今年の開催は30年ぶり、4回目ということになります。観覧される方は番付に注目してみたいかがでしょうか。

紙幅の都合により板番付の全文を掲載できませんので、ご希望の方は文書館（☎52-0571）までお問い合わせください。甲神社渡辺滋さん、井坂日出子さん、石井實さん、相撲博物館中村史彦さんにご協力をいただきました。

参考文献：澤田一矢『新装版 大相撲の事典』東京堂出版  
2000、金指基・日本相撲協会『相撲大事典』現代書館  
2002、「相撲」編集部『大相撲人物大事典』ベースボール・マガジン社2001

文書館 ☎52-0571